

## 新病害「トマト黄化葉巻病」の防除対策

平成18年1月に下都賀農業振興事務所管内のトマトハウスにおいて、上位葉が黄化し、葉巻症状を呈する株を確認しました。農業試験場病理昆虫研究室でPCR法による検定を行ったところ、1月12日に県内では未確認の *Tomato yellow leaf curl virus* (TYLCV) によるトマト黄化葉巻病であることが判明しました。

本病がまん延すると大きな被害になりますので、徹底した発生予防対策を行いましょ。

### トマト黄化葉巻病とは？

トマト黄化葉巻ウイルス(TYLCV)の感染によって発生する病気で、発病株は新葉の葉縁から退緑しながら表側に巻き、後に葉脈間が黄化し、縮葉となります。発病部位より上部では節間が短縮し、黄化萎縮症状を呈します。国内では平成8年に初発生が確認されました。

このウイルスは、タバココナジラミ バイオタイプQ及びシルバーリーフコナジラミ(タバココナジラミ バイオタイプB)によって媒介され、種子伝染、汁液伝染、土壌伝染、経卵伝染はしないことが報告されています。

オンシツコナジラミによっては媒介しません。



トマト黄化葉巻病の病徴

### タバココナジラミとは？

タバココナジラミの成虫は体長約0.8mmで、翅(はね)は白く、体色は淡黄色、4齢幼虫(蛹)は黄色で扁平な体で背面がわずかに盛り上がっています。

国内で確認されているタバココナジラミは、在来系統(バイオタイプ不明)バイオタイプB(シルバーリーフコナジラミ)、バイオタイプQです。これらのバイオタイプには形態的な差はなく、肉眼での区別は困難です。本県ではタバココナジラミ バイオタイプQが優占しています。

バイオタイプとは、形態上ほとんど区別できないが、遺伝的、寄主植物への影響、薬剤の感受性等の生物学的性質が異なる系統のことであり、タバココナジラミは世界で約40種類の系統が確認されています。

## コナジラミ類の見分け方は？

オンシツコナジラミとタバココナジラミ バイオタイプQ及びシルバーリーフコナジラミ(タバココナジラミ バイオタイプB)は混在して発生していることが多く、両種は非常に類似しています。両種を比べて見ると、4齢幼虫(蛹)が最も区別し易いと思われます。オンシツコナジラミは厚みのある楕円形(コロッケ状)で体色が白く、周囲にトゲ状の分泌物が多数見られます(写真 )。タバココナジラミは後部がやや細い楕円形で、体色は黄色で、トゲ状の分泌物が見られません(写真 )。

成虫は翅の形状に違いがあり、オンシツコナジラミは翅の角度が平面的で左右の翅が接していますが(写真 )、タバココナジラミは翅の角度が鋭角的で、左右の翅が離れているため、淡黄色の背中が見えます(写真 )。



写真 タバココナジラミ  
成虫



写真 タバココナジラミ  
4齢幼虫(蛹)



写真 オンシツコナジラミ  
成虫



写真 オンシツコナジラミ  
4齢幼虫(蛹)

## ウイルスの寄主範囲は？

国内で自然感染して症状が確認されているのは、栽培作物としてはトマト、ミニトマト、トルコギキョウですが、感染して無病徴の作物としてピーマン等があります。雑草で自然感染が確認されているのは、センナリハウスキ、タカサブロウ、ノボロギク、ノゲシ、エノキグサ、ハコベ、ウシハコベ、ホソバツルノゲイトウがありますが、いずれも無病徴です。

## 防除対策は？

トマト黄化葉巻病はウイルス病ですので、徹底した予防対策が必要です。病気の発生を防ぐためには、媒介虫を「施設内に入れなく、増やさない、施設外に出さない」ための次のような対策が必要です。

- 1 罹病株は伝染源となるので、見つけ次第抜き取り、埋没やビニール袋等で密封し枯死させてから処理する。
- 2 施設周辺の雑草が媒介虫の発生源となる恐れがあるので、除草する。
- 3 施設の開口部に、目合0.4mm以下の防虫ネットを張り、媒介虫の侵入を防ぐ。また、近紫外線除去フィルムの利用や黄色粘着板の設置も有効である。
- 4 育苗期～定植時の粒剤施用及び定植後の薬剤防除を行う。なお、タバココナジラミ バイオタイプQはシルバーリーフコナジラミ(タバココナジラミ バイオタイプB)と比べ薬剤感受性の低下がみられ、有効な薬剤が限られる。
- 5 栽培終了後に施設の蒸し込みを行い、残さに寄生しているコナジラミ類の拡散を防ぐ。

疑わしい症状を見つけた場合には、最寄りの農業振興事務所にご相談ください。

本資料に関する問い合わせ先: 栃木県農業環境指導センター  
TEL 028-626-3086 FAX 028-626-3012